

副詞的不定語の用法の変遷について

——鎌倉時代語から江戸語へ——

于 康

目次

- 一、はじめに
- 二、平安時代の「副詞」としての不定語の意味用法概観
- 三、鎌倉時代の『覚一本平家』について
- 四、室町時代の『天草版平家』について
- 五、江戸時代の『大藏虎明本狂言集』について
- 六、おわりに

一、はじめに

日本語の歴史に於いては、室町時代を境にして、古代語と近代語に分かれるとするのが通説である。疑問表現もこの期を境にして画期的な変化が見られた。特に「内容的疑問表現」⁽¹⁾に関して、疑問語と「カ」「ヤ」との相関関係に於いて、形態側面や構文的機能の観点から先学の研究が既に大きな成果を挙げており、例えば、室町時代の「内容的疑問表現」は論理的表現としての「疑問語……ぞ。」⁽²⁾（以下「不定語」をもち記述する）に固定化されたと解明された。こうした先

学の研究によつて疑問表現の辿つた史的変遷の道筋が次第に浮き彫りにされて来ているのである。

ところで、疑問表現の史的研究では、不定語それ自体の史的変遷の究明も極めて重要である。不定語の消滅と出現、特に意味用法に於ける他の不定語との受容と変容などについての考究は語彙の史的変遷の究明のみならず、文の構成成分の意味用法に於ける史的変遷の究明にも不可欠であろう。しかし、今まで、疑問語そのものに関する史的考究は殆ど行われていないようである。

鎌倉時代では、「中世の文学の中で最も中世らしいものとしては、軍記物語と称される一連の作品がある。その中でも『平家物語』は、(中略)軍記物語の白眉となつている」⁽⁴⁾ものである。又、室町時代では、その口語訳として『天草版平家物語』が存する。すると、『天草版平家物語』(以下『天草版平家』と略す)の不定語を、『寛一本平家物語』(以下『寛一本平家』と略す)の不定語と比較して考究すれば、一側面として、鎌倉時代から室町時代への変遷の実態を知ることが出来、更にその前後の平安時代の不定語と江戸時代の典型的な口頭語資料の『大藏虎明本狂言集』の不定語と比較すれば、大きな範疇に於ける把握が大凡出来るのではないかと考えられる。

本稿は、以上の観点から、不定語の史的研究の一環として、「いかで(か)」を中心に、同類の「いかに」「など」「いか」「いかが」も含め、形態的側面の変容や意味用法上の変遷の実態を通時的に考察し、その輪郭を明らかにするものである。

二、平安時代の「副詞」としての不定語の意味用法概観

平安時代、「副詞」として用いられた不定語の中で最も多用されたのは、「いかに」「など」「いかに(か)」「いかが」であるが、それぞれに役割分担があつたようである。これらの不定語の意味用法について、既に別稿で検討している⁽⁵⁾ので、省略するが、その要旨は次のようになる。

二・一 「いかに」

「いかに」は、文がどんな形で終止するかは重要ではなく、話し手の気持ちと関係せず、直接的に動作主体の動作・状態や動作等の生起の手段・方法などについて細部にわたる説明を求めようとするものであり、「いかに」其れ自体が「詞」⁶である。

二・二 「など」と「なか」

「など」「なか」と「いかに」は、共に原因や理由について説明を求めようとするものであるとされてきたが、「など」は、必ずしも述語文節に呼応を求めず、情報内容⁷の生起の原因や理由について細部にわたる説明を求めようとする「詞」の性格を有するものであるが、「なか」は、必ずしも述語文節に呼応を求めず、情報内容の生起の原因や理由について説明を求めようとすると同時に、話し手の気持ちも表出しており、「詞」「辞」の両方の性格を有するものである。

二・三 「いかに」

「いかに」は、「なか」「などか」とは異なり、述語文節に呼応を求め、同時に主として話し手の主観的な気持ちを直接的に表す希望表現や反語表現に用いられているが、たとえ疑問表現に用いられたとしても、疑念の解消を目的とせず、専ら話し手の心中に湧く疑念を予め表出するように、「辞」の性格を有するものである。

二・四 「いかに」

「いかに」は、「なか」と同じく必ずしも述語文節に呼応を求めないが、動作主体の動作を含む情報内容の状態・程度や生起の手段・方法などについて説明を求めようとすると同時に、話し手の気持ちも表出する「詞」「辞」両方の性格を有するものである。

二・五 用法整理

即ち、「いかに」と「など」は、専ら情報内容を限定するものであるが、「いかで(か)」は、専ら話し手の気持ちも限定するものである。「いかが」と「などか」は、情報内容を限定すると同時に話し手の気持ちも表出するものであると思われる。

三、鎌倉時代の『覚一本平家』について

三・一 鎌倉時代『覚一本平家』に於ける副詞的な不定語の意味用法概観

鎌倉時代では、「いかに」「など」「なか」「いかで(か)」「いかが」が平安時代と同様に多用されているが、形態的側面や意味用法上に変化が見られ始めるようである。次に「いかで(か)」を除いて、他の不定語の意味用法を概観しよう。

「いかに」は、矢張り専ら動作を限定するものであるが、

1 「……いかにもして彼鳴へわた(ツ)て、御行えを尋まいらせむとこそ思ひな(ツ)て候へ。御ふみ給はらん」と申ければ、

『平家物語日本古典文学大系』(以下「覚一」と略す) 覚一上巻28頁

2 「いかにもして、みやこちかき片山里にをき奉らばやと、さしも申つれどもかなはぬ事こそ、世にあるかひも候はね。……」

覚一上巻28頁

のように、「いかにもして」が「む」「ばや」と呼応して、話し手の願望や意志を表すという平安時代に見られなかった用法が出現した。

一方、平安時代では必ずしも述語文節に呼応を求めない「など」や「なか」が、『覚一本平家』では呼応を求めるようになり、表1のように、「など」「なか」は、「ぞ」と呼応して専ら「内容的疑問表現」に用いられるが、「なか」は、主として「べし」「む」と呼応して専ら反語表現に用いられる。元来専ら話し手の主観的判断を表す反語表現に用いられていた

表1 『覚一本平家物語』「など」「なか」「なかか」「なかかは」

なかかは	なか		なかか		なか	合計
	反語	疑問	反語	疑問		
1		6				む
			1			らむ
					1	けむ
1		25				べし
					7	ぞ
2	0	31	1	0	8	

のは不定語「いかで(か)」であることを想起すれば、このような意味用法を有するようになった「なかか」は、「いかで(か)」の意味用法の領域に進入して、同作品の「いかで(か)……べき」の意味用法に近づいたと考えられる。⁽⁹⁾

扱、「いかが」は、疑問表現に用いられる場合は、矢張り必ずしも述語文節に呼応を求めないが、反語表現に用いられる場合は、熟語となった表現を除いて、表2のように、殆ど「べし」と呼応するという変化が見られた。

即ち、『覚一本平家』では、不定語が「べし」と呼応してよく反語表現に用いられるという形態的な使い分けが見られると思われる。

又、平安時代では「いかがせむ」「いかがすべき」が熟語となって、専ら「仕方がない」「どうしようもない」という意味用法に用いられていたが、『覚一本平家』では、

- 3 「いかがせん、淀・いもあらあへやまはるべき、水のおち足をやまつべき」との給へば、
覚一下巻169頁
- 4 「年来あひぐしたりし女房に、今一度対「面」して、申たき事のあるはいかゞすべき」との給へば、

表2

平家	本	覚一		いか	かが	○
		疑問	反語			
			9			けむ
13				1		らむ
		やらむ1		5		べき
		12			3	すべき
			2		3	べからむ
		10			9	せむ
					8	せんずる
				1		む
					10	むずらむ
				1		むずる
		1				はせむ
13	26		50			合計

のように、「内容的問い」の表現にも用いられるようになっていく。3は、大將軍は川のほとりに進み出て、人々の気持ちをしようと思うであろうか、選択肢を提供して、どちらにすると聞く場面である。4は、三位中将はもう一度長年連れ添った女房に会いたいだが、どうすればよいかと、土肥次郎に聞く場面である。此の二例は共に疑念解消を志向し、動作の生起の手段や方法等について具体的に問い掛けるものである。

このように、同類の他の不定語が変遷しているとすると、「いかで(か)」にも其れに應じる変化が生じるはずであろう。

三・二 『覚一本平家』に於ける「いかで(か)」

鎌倉時代の『覚一本平家』では、「いかで(か)」と呼応する述語文節の推量の助動詞や終助詞の種類が著しく減少し、表3のように、主として「べし」と「む」と呼応するようになった。然し、『源氏物語』では三百三十四例のうち、「べし」と呼応した例が十六例しかなかった。

なお、平安時代によく見られる希望を表す用法が見られなくなった。又、次の二例は疑問表現とされているが、⁽¹¹⁾反語表現と見るべきであろう。

5 「……。馬に乗ながら門のうちへまいるだにも奇怪なるに、下部共まい(ツ)てさがしまいらせよとは、いかで申

表3 『覚一本平家』「いかで」「いかでか」⁽¹²⁾

いかで	反語	2				
いかでか	反語	43	1	6	1	
					2	ぞ
						合計
					51	4

ぞ。・・・」

覚一上巻287頁

6 「むかひ風にわたらんといはばこそひが事ならめ、順風なるがすこしすぎたればとて、是程の御大事にいかでわたらじとは申ぞ。舟つかまつらずは、一々にしやつばら射ころせ」と下知せらる。 覚一下巻305頁

5 は、馬に乗ったまま門の内に入り、下人を命じて宮を探させる光永に、長兵衛尉は、馬に乗りながら門の内へ参ることさえもけしからぬのに、「下人ども参ってお探し申せ」とは、何で申すのだと言った場面である。此処の「いかで申ぞ」は、「申す」という動作の生起の原因や理由を問い掛けるものではなく、話し手の「申すべきではない」という判断を表すものであろう。6 は、船を出すことが出来ないといっている水夫に、判官は大いに怒って、向かい風なのに渡ろうというなら、それは不都合だろうが、順風なのが多少強すぎたからといって、これほど重大な時機になんで渡らないと申すのだと言った場面である。此処の「いかでわたらじとは申ぞ」は、5と同じく、渡らない理由を問い掛けるものではなく(実は渡らない理由について、先に水夫が既に言ったのである)、「申すべきではない」という判官の判断を表出するものであろう。これは、其の会話内容の続きの「船を出さぬのなら、奴らをいちいち射殺せ」からも裏付けられるであろう。従って、此の二例の「いかで・・・ぞ」も共に疑念解消を求めているのではなく、反語表現に用いられていると認められるのではないかと思われる。而も、此の二例は、聞き手の存在を意識した発話行為であり、「ぞ」は疑問を表すものではなく、話し手の判断の気持ちを聞き手に持ちかける機能を有するものであると考えられる。

従つて、『覚一本平家』では、「内容的疑問表現」の用法も存しなくなり、五十五例の「いかで（か）」全てが疑念解消を志向するものではなく、専ら話し手の判断の気持ちを表す反語表現に用いられるものであるといえそうである。即ち、『覚一本平家』では「いかで（か）」の「辞」の性格が一層鮮明になつたのではないかと思われる。

尚、「べし」と呼応する不定語がよく反語表現に用いられている原因については、鎌倉時代の『覚一本平家』まで多岐に渡つて同義異形態の様々の不定語が存していたが、伝達機能の有効性という点からして、其れは不経済であるので、包摂関係を有する上位語に統一される要求に因應するための変化が生じはじめたからではないかと思われる。このような変化の発生は、室町時代の旧語の消失と新語の誕生及び不定の意味を包括する上位語の出現の条件づくりの役割を果たしていると考えられる。

四、室町時代の『天草版平家』について

四・一 室町時代の『天草版平家』に於ける副詞的な不定語の意味用法概観

室町時代で、多用されている不定語は、「いかに」「いかで（か）」「いかが」「なぜに」「なんと（なにと）」とも表記される」である。此の時代になると、述語文節に現れる助動詞や終助詞の種類が更に少なくなり、不定語の疑問表現では殆ど「ぞ」または「か」で終止されている。

「いかに」は矢張り専ら動作を限定し、内容的疑問表現に用いられているが、『覚一本平家』では話し手の願望や意志を表していた「いかにもして……む」「いかにもして……はや」は、「いかにもして……う」「いかにもして……うずる」「なんとぞして……う」「なんとぞして……うずる」のように変容している。また、

- 7 「いかに宣旨の御使をばかうはするぞ」といひければ、「宣旨とはなんぞ」とて、
7 宣旨のを使いはばなせにかうわするぞと言えば、何の宣旨とわと言うて、

副詞的不定語の用法の変遷について

『天草版平家物語』（以下「天草」と略す） 天草2/III/22（巻／頁／行）、以下同
 7のように、『覚一本平家』では内容的問いの表現に用いられた「いかに……ぞ」は、『天草版平家』では7のように「な
 ぜに……ぞ」に変容し、「なぜに」は専ら情報内容のみを限定する例もある。

一方、「など」は既に使用されなくなり、「などか」は、

8 よにも苦しうで、などか思いをくことがなうてわござらうぞ？

天草4/334/7

の一例しか存しない。其の代わりに出現したのは「なぜに」である。

9 「などこれ程の御大事に、軍兵共をばめしぐせられ候はぬぞ」と申せば、

覚一上巻159頁

9' なぜにこれほどの御大事に軍兵どもをば召し具せられぬぞと申したれば、

天草1/30/10

のように、『覚一本平家』の9の「など……ぞ」は、『天草版平家』では9の「なぜに……ぞ」に変容している。9'の文
 の構造は9の其れと同じであり、而も文脈も同様であるから、「なぜに」は「など」の意味用法を踏襲し、情報内容を限
 定すると同時に話し手の気持ちも表出するものであるといえそうである。

ところが、鎌倉時代に「など」と区別されてきた「などか」は、

10 「……、いましばしもなどか見ざらん。親となり、子となり、夫婦の縁をむすぶも、みな此世ひとつにかぎらぬ契
 りぞかし。などさらば、それらがさ様に先立けるを、いままで夢まぼろしにもしらざりけるぞ。……」

覚一上巻238頁

10' 今しばしも見うものを！親となり、子となり、夫婦の縁を結ぶも、みなこの世ひとつにかぎらぬちぎりぢやに、
なぜにさらばこれらがさやうに先だつたを今まで夢幻にもしらなんだぞ？

天草1/90/24

のように、『覚一本平家』の反語表現の「などか見ざらん」が、『天草版平家』では「見うものを！」のように、直接的
 な表現に変わった例も見られる。其の一方で、

11 「……、今度こそめさせ給ふ共、つるにはなごか赦免なうて候べき」となぐさめたまへ共、 覚一上巻215頁
11' たといこの瀬にこそめさせらるるとも、ついになごせに赦免なうてあらうずるかと、慰めらるれども、

天草1 / 75 / 16

のように、『覚一本平家』に於いて、反語表現に用いられ、専ら話し手の主観的な判断を表す「なごか……べき」も『天草版平家』に於いて「なごせに……ぞ」に変容した例も見られる。

『覚一本平家』の「なご」「なごか」と、其れと対応する『天草版平家』に於ける諸形式は表4のようになる。
扱、なお「いかが」が七例存しているが、その意味用法は、表5のようになる。

「なご」「なごか」と異なつて、『覚一本平家』に於ける「いかが」は、情報内容にも深く係わつているのである。

12 家貞待うけたてま(ツ)て、「さていかが候つる」と申ければ、 覚一上巻86頁

12' この郎等の家貞待ちうけて、さていかが候つたぞと申したれば、 天草1 / 6 / 15

13 少将まちうけ奉て、「さていか候つる」と申されければ、 覚一上巻167頁

13' 少将待ち受け奉つて、さていか候つるぞと、申されたれば…… 天草1 / 40 / 11

12と13とは、形態も同様であり、而も意味用法も同じで共に「内容的問い」の表現に用いられるものであるが、「いかが」と対応するのは、「なにと……ぞ」という形式である。

然し、『覚一本平家』で反語の情意を表している「いかが……べき」は、『天草版平家』では、

14 「相伝のよしみはさる事にて候へども、いか朝敵となれる人に同心をばし候べき。殿中に奉公仕うずる候」と申ければ、 覚一上巻294頁

14' たとい三位入道わ日ごろの宜でござるとも、朝敵となられた人でござれば、なぜに同心をばつかまつらうぞ？

天草2 / 118 / 13

表4

覚一本平家	例数	天草版平家					例数
など…ぞ	7	なぜに…(否定)ぞ	なぜに(少ない)ぞ	なぜに…(う)ぞ	なぜに…(否定)ぞ	なぜに…(否定)ぞ	5
など…けむ	1	なぜに…(う)ぞ					1
などか…む	6	なぜに…(否定)ぞ					2
		…ものを!					1
などか…べき	25	なんとしては…(う)ぞ					1
		…まじい					1
		…まじい					1
		…(まじい)か					1
		なぜに…(う)ぞる)か					1
		なぜに…(う)ぞ					3
などかは…べき	1	なにとて…まじことわ?					1

表5

平家	天草版				
	いかが				
反語	疑問				
	2	ぞ			
1		(う)ぞ			
	1	(う)ぞる)ぞ			
2		う			
	1	省略			
3	4	合計			

のように、「なぜに……(う)ぞ」に変容している。

『覚一本平家』の「いかが」と、其れと対応する『天草版平家』の諸形式は表6のようになる。

『天草版平家』では「いかが」はなお内容的疑問表現や反語表現に用いられているが、『覚一本平家』の「いかが」と対応する「なにと……ぞ」と「なぜに……(う)ぞ」とは、前者は専ら内容的疑問表現に用いられるが、後者は専ら反語表現に用いられるというはつきりとした使い分けが存しているようである。

四・二 『天草版平家』に於ける「いかで(か)」

表7に示されているように、『覚一本平家』で述語文節に使用されていた「べし」「べきや」「む」「むや」「ぞ」は、『天草版平家』では殆ど「ぞ」や「か」に変容しており、又、

15 たとい人なんと申すとも、七代までわこの一門をばいかでか思し召し捨てさせられうぞぢやに……

天草1 / 42 / 18

16 池の尼公いかに申されたりとも、清盛入道殿御許しなくわ、頼朝いかでか命生きて二十余年の春秋をば送りまら

天草4 / 361 / 19

しようぞ？

のように、全ての用例が反語表現に用いられている。

此処で注目すべき点は、「ぞ」が「む」から変容してきたと言われている「う」に下接するということである。これは、鎌倉時代までにはあり得なかつたが、『覚一本平家』に出現し、『天草版平家』では、

17 たとい三位入道わ日ごろの誼でござるとも、朝敵となられた人でござれば、なぜに同心をばつかまつらうぞ？

天草2 / 118 / 13

18 源氏わ近年度々の合戦にうち勝つて運を開きはじむるに、なんぞ運のつきた平家に同心して、運を開く源氏をそむかうぞ？

天草3 / 176 / 3

表6

覚一本平家		用例数	天草版平家		用例数
いかが…	9	いかが…ぞ	1		
いかが…べき	14	なせに…(う)ぞ	2		
いかが仕らむずる	1	なんとしようぞ	1		
いかが候はんずらん	1	いかがでござらうぞ	1		
いかが候べからむ	1	いかがござらうぞ	1		
いかがしたりけん	5	なんとしたか	1		
いかがあらん	1	なんとかしつらう	1		
いかがあらんずらん	8	なんとあらうぞ	1		
いかがあるべき	3	なんとあらうか	1		
		なんとしようぞ	1		
		なんとあらうぞ	1		
		なんと	1		
いかがすべき	3	なんとしようぞ	1		
		なんとしようぞ	5		
いかがせむ	19	なんとともならうぞれ	1		
		いかがしようずるぞ	1		

表7

いかでか		いかで		
反語	疑問	反語	疑問	
1				ぞ
7				(う)ぞ
1				(うずる)ぞ
		1		(まい)か
3				う
12		1		合計

19 さて打たせて一番舞うたに、仏御前わ髪姿より始めて、みめ、形世にすぐれて、声もよう、節も上手であつたれば、なにしに舞も損じようぞ？

天草 2 / 96 / 15

20 少将をばしばらく宰相にあづけさせられい、宰相かうでござれば、なじかわ僻事をさせまらしようずるぞと、申されたれば……

天草 1 / 38 / 19

の「なぜに……(う)ぞ」「なんぞ……(う)ぞ」「なにしに……(う)ぞ」「なじかは……(うずる)ぞ」のように、多用されている。

然し、此処に問題となるのは、不定語と「ぞ」との関係はどう見るべきかということである。即ち、「ぞ」は、不定語と呼応するものなのか、不定語と直接的に関係せず、話し手の気持ちの上にもう一種の気持ちを加えるものなのかということである。

「ぞ」について、「ぞ」には指定よりも相手へもちかける気持ちが強まり、話し手が疑問意図を相手に強くうち出したいときに伴いやすかつたと解釈されている。従つて、「ぞ」の付く以前に既に完全に表出している話し手の疑問や判断の気持ちを、「ぞ」によつて聞き手に持ちかけるのであると考えられる。即ち、「ぞ」それ自体は疑問や反語を表す機能を

有せず、只、聞き手の存在を前提として、ある纏まった話し手の気持ちを聞き手に話しかける機能を有すると見るべきではないかと思われる。「ぞ」が「むゞう」に下接するという用法は、平安時代にはなかったし、鎌倉時代にはあつても主流の用法ではなく、変化の前兆を示すものであるといえそうである。「天草版平家」では、このような質的な変化が生じ、「ぞ」の使用が主流を占めている原因については、聞き手の存在を前提とする口頭語の作品の性格の要求によるものであろうと考えられる。然し、内容的疑問表現それ自身が聞き手に持ちかける機能を有するようになるにつれて、「ぞ」の存在理由がなくなる可能性が十分にあり得ると推測される。実際、『大蔵虎明本狂言集』では、「なぜに」が単独に使用されたり、文末に「ぞ」が存在しない例がよく見られるのである。従つて、

21 舎人牛飼いと申すわ、下臈の果てで心あらうずる身でわござらねども、年ごろの誼をいかでか忘れ奉らう？

天草 4 / 350 / 8

22 度々の朝敵を平げまらした奉公をばいかでかを忘れなされう？

天草 4 / 380 / 7
天草 4 / 406 / 18

23 いかでかきることの「ござらう」と申せども、あまり仰せらるるによつて力に及ばず、
のように、「いかでか……う」のみでも、十分に話し手の気持ちを表出することが出来る。

扱、『寛一本平家』の「いかで（か）」と、其れと対応する『天草版平家』の諸形式は表 8 のようになる。

『寛一本平家』の「いかで（か）……べき」は、『天草版平家』では、「いかで（か）……（う）ぞ」「なぜに……（う）ぞ」「なんとして……（う）ぞ」などに変容し、反語表現に使用され、話し手の主観的な判断を表すものもあるが、

24 仏御前「それ又いかでかきさる御事さぶらふべき。……」
平家上巻 98 頁

24' それまたあらうずることでもござない。
天草 2 / 97 / 3

のように、有標表現から無標表現に変容し、直接判断の形で用いられるものも存している。また、

25 「とねり牛飼な（ン）ど申物は、いふかひなき下臈のはてにて候へば、心あるべきでは候はねども、年ごろめしつ

表 8

覚一本平家物語		用例数		天草版平家物語		用例数	
いかでか…べき		55		いかでか…(う)ぞ		4	
				いかでか…(うずる)ぞ		1	
				いかで…(まい)か		1	
				なぜに…(う)ぞ		2	
				なぜに…(否定)ぞ		1	
				なんとして…(う)ぞ		5	
				なんとしてか…(う)ぞ		1	
				なにとこも…(う)ぞ		1	
				…まじい		1	
				…ない		4	

かはれまいらせて候御心ざしあさからず。……」

25' 舍人牛飼いと申すわ、下臈の果てで心あらうずる身でわござらねども、年ごろの誼をいかでか忘れ奉らう？

天草 4 / 350 / 7

覚 一下巻 351 頁

のように、無標表現から有標表現に変容し、「私を長年召し使つて下さった宗盛公の御恩は浅いものではありません」という意味を「いかでか……う」という反語の形で表出するものも存している。此の現象の出現の原因については、「いかで(か)」は、全く疑問表現と関係せず、専ら話し手の判断を表すものに用いられる「辞」として定着したためと考え

副詞的不定語の用法の変遷について

られる。

四・三 用法整理

以上の検討から、様々の形式の不定語が、段々「なぜに」に統合されつつあるのではないかと思われる。「なぜに」は、使用範囲が広く、「内容的問い」の表現にも「内容的疑い」の表現にも用いられているし、専ら話し手の主観的な判断の気持ちを表出する反語表現にも用いられている。即ち、「なぜに」は不定の意味を包括する上位語としての性格を次第に有するようになり、他の不定語が「なぜに」に同化される可能性はあり得るであろうと思われる。

扱、室町時代では、「不定語……(か)——ぞ」という形態は失われつつあり、「不定語……ぞ」という形態が基本形として用いられているという大きな特徴も見られる。其の原因について、「ぞ」の機能が強く意識されるようになったため「か」は次第にその存在意義を失い相手への持ちかけはひとえに文末の「ぞ」にゆだねられるようになるからであるというように解釈されているが、妥当だと思われる。⁽¹⁵⁾

然し、「いかで(か)」の場合は、全くそれと異なる。文中に「か」が存しなくなっても、「いかでか」は「いかで」に代わられることがなく、依然として「いかで」と同様な意味用法で用いられている。⁽¹⁶⁾ 鎌倉時代の『覚一本平家』では、「いかで(か)」に於いて、「いかでかは」のように、更に係助詞「は」を下接するという形態は既に見られず、『天草版平家』『天草版伊曾保物語』『大蔵虎明本狂言集』にも「いかでかは」という用例は見られないようである。「いかで」「いかでか」は、元々専ら話し手の気持ちを表すものであるから、『覚一本平家』や特に『天草版平家』では、「いかでか」を、「いかで十か」と見るのではなく、一つ固定した反語を導く「陳述副詞」として、広く意識されて用いられているのではないかと思われる。⁽¹⁷⁾

『覚一本平家』に於ける「不定語……ぞ」の形式は、基本的には、対話相手に対して明確に解答を要求する強い「問い」の表現であって、心中思惟で強い感情表現として使用されるのも、言語主体の内面への「問いかけ」、つまり自問自

答的表現のためであろうと解釈されているが、然し、以上の『天草版平家』の「不定語……ぞ」の用例を検討すると、内容的疑問表現に用いられた「いかか……ぞ」や「なんと……ぞ」「なぜに……ぞ」の場合は其のような性格を有すると考えられるが、「いかで（か）……（う）ぞ」「なぜに……（う）ぞ」「なんととして……（う）ぞ」の場合は、其れと全く異なっているといえそうである。従つて、「不定語……ぞ」の意味用法は、『天草版平家』では質的な変化が生じたといえそうである。

五、江戸時代の『大蔵虎明本狂言集』について

江戸時代の『大蔵虎明本狂言集』で多用されているのは「なぜに」「などか」「いかで（か）」であるが、その中で「なぜに」が主として用いられている。「なぜに」に関する考究は別稿に譲ることとする。此処で、「などか」と「いかで（か）」の意味用法を検討してみたい。

表9は、『大蔵虎明本狂言集』の対応表であるが、「などか」「いかで（か）」は、「（う）ぞ」又は「（う）か」と呼応する例が一例も存していない。なお、「う」と呼応する例も存していない。

「などか」の用例は、

26 いろはのもんごんにていのるならば、いかなるあくしんの犬なりともなどかきどくのなかるべき

『大蔵虎明本狂言集の研究本文篇』（以下「狂言」と略す）上巻404頁

27 いかにあくしんの犬なりとも、明王のさつくにかけていのるならば、などかなつかでかなふまじひと、

狂言上巻404頁

28 いかにあなたこなたへぐなりぐなりとするこしなりとも明王のさつくにかけまどいのるならばなどかすはらであ

るべきと

狂言上巻410頁

である。

従つて、『大藏虎明本狂言集』での「などか」「いかで(か)」の意味用法は「擬古」用法であつたと考えられないであろうか。更にいえば、「擬古」用法のモデルとなつたのは、『天草版平家』に見出せるような「不定語……(う)ぞ」という形式ではなく、鎌倉時代の『覚一本平家』までの「不定語……推量の助動詞や終助詞」という形式であつたと考えられる。

六、おわりに

以上、『覚一本平家』と『天草版平家』に於ける「いかで(か)」を中心に、同類の他の副詞的不定語とも関連させながら考察してきた。

平安時代では、副詞的不定語の種類が豊富であり、意味用法では重なっているものもあるが、使い分けが凡そはつきりとされていたようである。鎌倉時代の『覚一本平家』では、述語文節に現れる助動詞や終助詞の種類が著しく減少するにつれて、不定語と呼応語との関係が改めて整理され、形態的側面にも意味用法上にも大きな変化が生じ、また不定語の間の意味用法の変化も見られ、不定の意味を包括する上位語の出現を求めようとする傾向が現れたといえそうである。室町時代の『天草版平家』では、「など」がなくなり、「などか」も殆ど使用されなくなったが、其の代わりに「なぜに」が現れた。「なぜに」は「いかに」「いかで(か)」「いかが」「など」「などか」などの包括的意味用法を有するようになったものであり、上位語として相応しい資格を有するものでありそうに思われる。

注

(1) …宮地裕氏は『新版文論』(明治書院1979年)に於いて、疑問表現を「説明要求の疑問表現」と「判定要求の疑問表現」

副詞的不定語の用法の変遷について

に分類される。然し、山口堯二氏が『日本疑問表現通史』（明治書院1990年20頁）において指摘されるとおり、「……要求」は「問い」の性格が強い。従って、本稿は阪倉篤義説に従うことにする。阪倉篤義『日本語表現の流れ』岩波書店1993年147頁参照。

- (2) 長瀬富子「室町時代の疑問表現―助詞を中心として」大修館『言語と文芸』第54号1967年45頁。
- (3) 不定語の定義は尾上圭介説に従う。尾上圭介「不定語の語性と用法」渡辺実編『副用語の研究』明治書院1983年404頁。
- (4) 佐藤喜代治『国語史上』桜楓社1973年174頁
- (5) 拙稿「中古和文における『いかで』『いかに』『いかが』の機能」『山口国文』第19号1996年3月、「『いかで』『いかに』『いかが』の語法特性」『解放軍外語学院学報』第三期1995年、「など」と「なか」の意味用法とその変遷過程」『国文学放』第147号1995年9月号参照。
- (6) 「詞」「辞」の定義は、時枝誠記説に従う。時枝誠記『日本文法口語篇』岩波書店1982年。
- (7) 情報内容とは、話し手の気持ちを含まない文の部分である。「命題」「ことがら」ともいう。
- (8) 話し手は「表現主体」ともいう。話し手、語り手、書き手のことを指す。
- (9) 筆者の調査による（他稿で詳しく検討している）。
- (10) 関一雄「源氏物語のサ行変格動詞考（二）——『物語用語』としての性格——」山口大学『文学会志』第四十五巻1994年9、10頁を参照。
- (11) 磯部佳宏氏は「不定語『いかで』の構文的性格——意味用法・表現性をめぐって——」（『山口国文』第11号1988年）と「『平家物語』の要説明疑問表現」（明治書院「辻村敏樹教授古稀記念日本語史の諸問題」1992年）に於いて、「いかで……ぞ」の二例を疑問表現とされ、他の例を全て反語表現とされている。
- (12) 同注十一。
- (13) 例えは、「さてたれどのへとかき候はうぞ」覚一上巻362頁である。
- (14) 岡村和江「第四章係助詞」560頁〜564頁松村明編『古典語現代語助詞動詞詳説』学燈社1970年
- (15) 長瀬富子上掲論文49、50頁参照。

(16)：『天草版伊曾保物語』『大蔵虎明本狂言集』『御伽草紙集』を調査してみると、同様の結果を得た。

(17)：磯部佳宏氏は上掲「不定語「いかで」の構文的性格——意味用法表現性をめぐって——」の66頁に於いて「中世の『いかで』は、係助詞「か」を伴った「いかでか」の形で反語表現となる用法に固定化してくるとみてよいであろう」と指摘されている。

(18)：磯部佳宏氏は注十七論文に於いて、「いかで」による希望表現が言語主体自身の内面的な表現であり、疑問表現は基本的には言語主体内部の「疑い」の表現であり、相手に対して、積極的に問い掛けるという性格のものではないと言えるかと解されている。

(19)：拙稿「『天草版平家物語』における『なぜに』の意味用法」『広島大学日本語教育学科紀要』第6号1999年3月参照。

・『天草版平家物語』の表記は、江口正弘『天草版平家物語対照本文及び総索引本文編』明治書院1986年に従う。
主な参考文献…(注に取り上げた著書や論文は含まない)

阪倉篤義「上代の疑問表現から」『国語国文』第二十七卷第十一号1958年。

……………「文法史について——疑問表現の変遷を一例として」『国語と国文』特輯号1960年
安田 章「助詞(2)」『岩波講座日本語7』1977年。

外山映次「質問表現における文末助詞ゾについて」『国語学』三十一1957年。

大野 晋「係り結びの研究」岩波書店1993年。

仁田義雄「係結びについて」明治書院『研究資料日本文法第5巻助辞編(一)助詞』1985年

南不二男『現代日本語文法の輪郭』大修館1993年。

北原保雄『日本語助動詞の研究』大修館1984年。

……………『日本語の文法』中央公論社1984年。